

Sakura

藤原 絵理子

駅からのバスが暗い杉林を抜け、峠からずっと続いていた下り坂が緩やかになって一息つく頃、まばらになった杉木立の向こうに懐かしい風景が広がってくる。峠のずっと手前にあるお寺の前で乗客のほとんどは降りてしまって、バスに乗っているのは、チャコールグレーのスーツを着た初老の紳士と大きな荷物を足下に置いた行商のおばちゃん、それからあたしの3人だけである。

川沿いの停留所でバスを降りたあたしは、湾曲した流れの向こうに見える橋を眺めて深呼吸をする。あの橋を渡れば、あたしが帰ろうとする場所はすぐ先だ。

橋を渡って、田んぼの中の上り坂を登っていく。あたしは橋の真ん中から小石を投げてみた。流れの淀みに楕円形の波紋が広がって、最初物珍しそうに集まってきた小魚の群れが、しばらくすると、なーんだ、という雰囲気泳ぎ去っていった。あたしは、わけもなく楽しい気分になった。

川のほとりには枯れ草に混じって新しい緑が湧きあがっていた。ところどころに、伸びきって開き果てた露の茎があって、その新しい緑に出番を譲ろうとしている。まだ練習中のウグイスが、「ほーほー」と鳴いては休み、しばらく間をおいて、残りの「けきょ」を鳴く。

祖母は前庭と田んぼの間を流れる小川でダイコンを洗っていた。その後ろ姿は、春の中に埋もれてしまうのではないかと思うくらい小さく、そして透き通って見えた。

「おばあちゃん…」。あたしの声に振り返った祖母は、立ち上がって少しまぶしそうな眼をした。

「早かったねえ。おかえり。待っとったんよ、カオルちゃんが帰るいうんで」

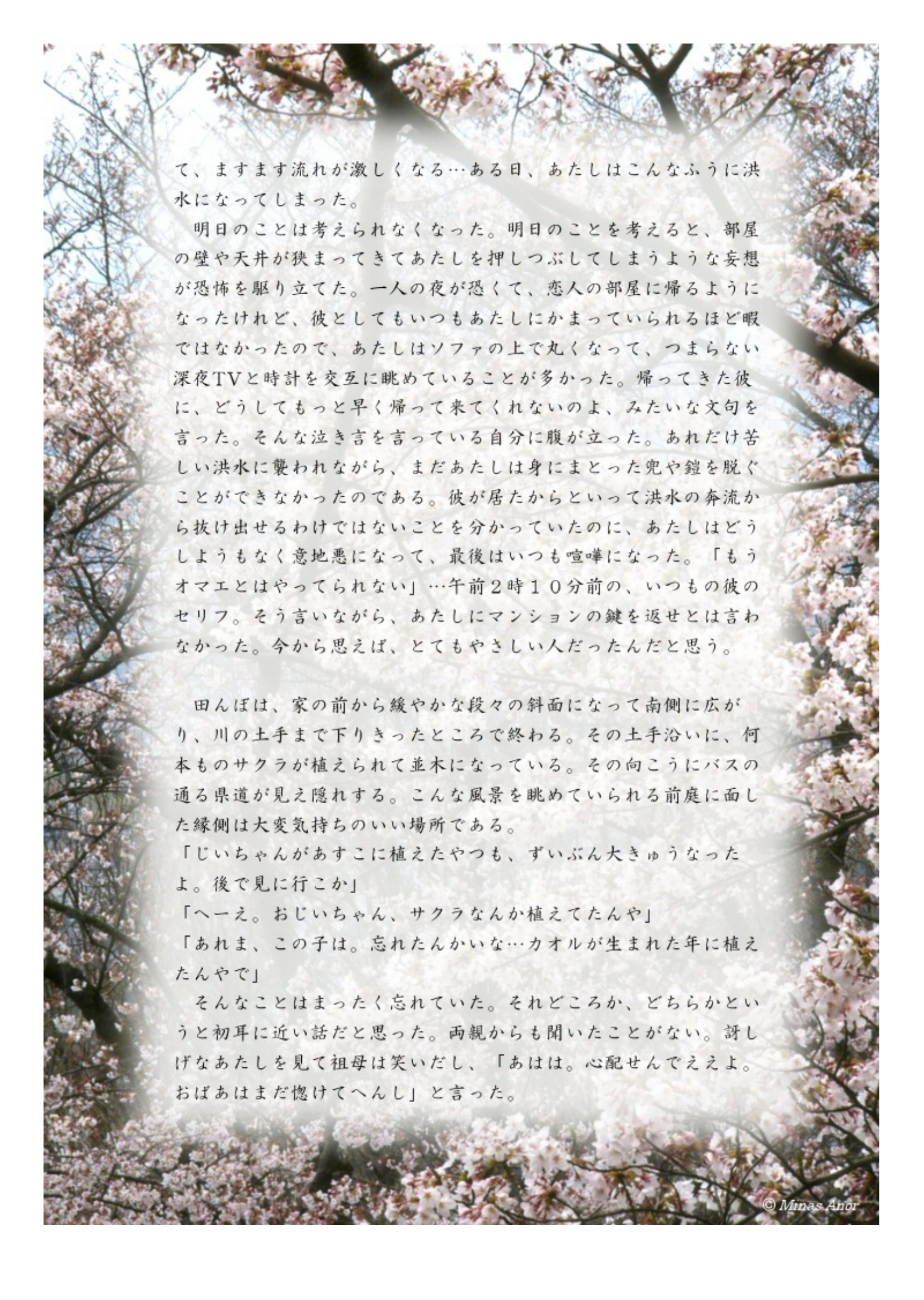
そう言いながら、祖母はタオルで手を拭いた。何年も前にあたしが誕生日のプレゼントにあげたウサギのタオル…あたしは、この土地にいつも祖母がいて、あたしのことを思ったりしてくれているのだということに改めて気づく。プリントが少し色あせて、縁のくたびれたタオルが、あたしの目頭を熱くする。

「おばあちゃん、元気やった？ ただいま」

祖母は、子供の頃からずっとそうしてきたように、あたしを両腕に抱いた。それから、あたしの頭をぼんぼんと叩いた。いつの頃からか、あたしはずっと大きくなり、祖母を見おろすような格好になってしまったけれど、帰ってきた孫を迎える儀式は変わらない。あたしは少ししゃがんで、子供の頃と同じように、彼女の首に抱きつく。

土蔵の横に咲いたサクラが風に揺れる。祖母の白髪を透かして、うす紅の幻みみたいな雲が揺れる。彼女のやわらかな日なたの香りに包まれると、あたしは日だまりのネコになって、全身で大きな伸びをする。

街のざわめき、せわしなく行き来する人の群れとクルマの列、そして毎日同じレールの上を同じ架線に触れながら往復する電車。疲れ果てた表情の人波をかき分けるように、颯爽と歩いているあたし…どこでどんなふうにして手に入れたのかさえ忘れてしまった自信が、あたしを舞い上がらせ、傲慢にし、かけずり回らせていた。底から少しずつ落ちる心のしずくを受け止めていた容れものが、知らない間にいっぱい満たされて溢れ始める…そんなことに気づかずにいた間に、溢れて流れになった心は、容器の壁を激しく削り取っ



て、ますます流れが激しくなる…ある日、あたしはこんなふうに洪水になってしまった。

明日のことは考えられなくなった。明日のことを考えると、部屋の壁や天井が狭まってきてあたしを押しつぶしてしまうような妄想が恐怖を駆り立てた。一人の夜が恐くて、恋人の部屋に帰るようになったけれど、彼としてもいつもあたしにかまっていられるほど暇ではなかったので、あたしはソファの上で丸くなって、つまらない深夜TVと時計を交互に眺めていることが多かった。帰ってきた彼に、どうしてもっと早く帰って来てくれないのよ、みたいな文句を言った。そんな泣き言を言っている自分に腹が立った。あれだけ苦しい洪水に襲われながら、まだあたしは身にまとった兜や鎧を脱ぐことができなかったのである。彼が居たからといって洪水の奔流から抜け出せるわけではないことを分かっていたのに、あたしはどうしようもなく意地悪になって、最後はいつも喧嘩になった。「もうオマエとはやってられない」…午前2時10分前の、いつもの彼のセリフ。そう言いながら、あたしにマンションの鍵を返せとは言わなかった。今から思えば、とてもやさしい人だったんだと思う。

田んぼは、家の前から緩やかな段々の斜面になって南側に広がり、川の土手まで下りきったところで終わる。その土手沿いに、何本ものサクラが植えられて並木になっている。その向こうにバスの通る県道が見え隠れする。こんな風景を眺めていられる前庭に面した縁側は大変気持ちのいい場所である。

「じいちゃんがあすこに植えたやつも、ずいぶん大きゅうなったよ。後で見に行こか」

「へーえ。おじいちゃん、サクラなんか植えてたんや」

「あれま、この子は。忘れたんかいな…カオルが生まれた年に植えたんやで」

そんなことはまったく忘れていた。それどころか、どちらかというところ初耳に近い話だと思った。両親からも聞いたことがない。訝しげなあたしを見て祖母は笑いだし、「あはは。心配せんでええよ。おばあはまだ憶けてへんし」と言った。



土蔵の横には、昔、牛を飼っていたという小屋があって、今は柴や薪の置き場になっている。そのぼっかりと空いた暗がり、土蔵の海鼠壁を背景にして、はらはらとうす紅が舞い落ちる。風もないのに…と、思わず独り言を口にして、ふと目を上にやると、蜜好きなヒヨドリが1羽、うす紅の雲に埋もれながら花を突いていた。あ、そうだ…あたしがほんの子供の頃、この家の座敷に端座して、刀の手入れをしていた祖父の姿が頭をよぎって、そのサクラの話思い出した。あたしが完全に忘れてしまっていたのは、祖父が亡くなって以来、誰も彼の話を公然としなくなったからだ。

夕暮れが近くなると霞が濃密さを増して、土や川面から生命の発する水蒸気の香りが充満してくる。あたしと祖母は、背負い籠の中に鎌を放り込んで、田んぼを何枚か隔てたところにある畑に向かった。そこからだと、サクラ並木はすぐ先になる。

昔、中国の清という国と戦争をした時、この村落出身の軍人がたいそう活躍して還ったのを記念してみんなで植えた、というのがこのサクラの始まりである。とりわけ、激しい戦闘をなんども経験しながら大きな怪我をすることがなかったという逸話から、いつの頃からか子供や孫が生まれると元気に立派に育つようにとサクラを植える人が現れ始めたのだそうだ。

「ほれ、これこれ。これがカオルのサクラ」

祖母が背負っていた籠をおろして指さした。

「土が良かったんか、不思議と大きゅうなるのが早いんよ、このサクラは」

そう言って、祖母はサクラとあたしを交互に眺めて満足そうに頷いた。あたしが生まれた時に植えられたサクラは、20数年かけてこんなにも大きくなって花を咲かせ、この田んぼで野良仕事をする人や、向こう岸の県道を走るバスの乗客、それから材木を満載したトラックの運転手、そんな人たちの目を楽しませているに違いない。

20数年…あたしは何をしてきたんだろう？

少しばかりお利口だった女の子は、たいして苦勞することもなく自尊心を満足させる術を身につけ、とりまく人たちも彼女の幻術に惑わされ続けた。いつの間にかその幻が作り上げた仮面が本当の自分であるのか、その対極にあって仮面が蔑んでいるものが本当の自分であるのか、わからなくなった彼女は、仮面が指し示す方角に向

かって進むことに、向上心という心地よい名前をつけたのだ…その少女があたしだった。そうやって、仮面が蔑んでいる自分をどこかみすぼらしい納屋の中に幽閉し、弱って干からびていくのを眺めていた間に、あの県道の白いガードレールの下は新しい護岸壁で固められ、集落の古い家のかわりに何軒もオモチャみたいにかわいい家が建った。そんなふうによこの風景も少しずつ変わってきたけれど、あたしのサクラは土の隙間から水に溶けた養分を吸い上げ、希薄な炭酸ガスを吸い込んだ葉っぱに光を集めて、着実に日々の生業を重ねながら、着々と成長してきたのだ。雪の重みや風のいたずらに枝を折られたことも、毛虫に葉っぱを食べられてしまったこともあっただろう。お腹を空かせて里まで下りてきたイノシシが、幹の皮をかじったことだってあっただろうけれど、あたしのサクラは、そんな傷あともすべて残したまま、そこで花を咲かせていた。

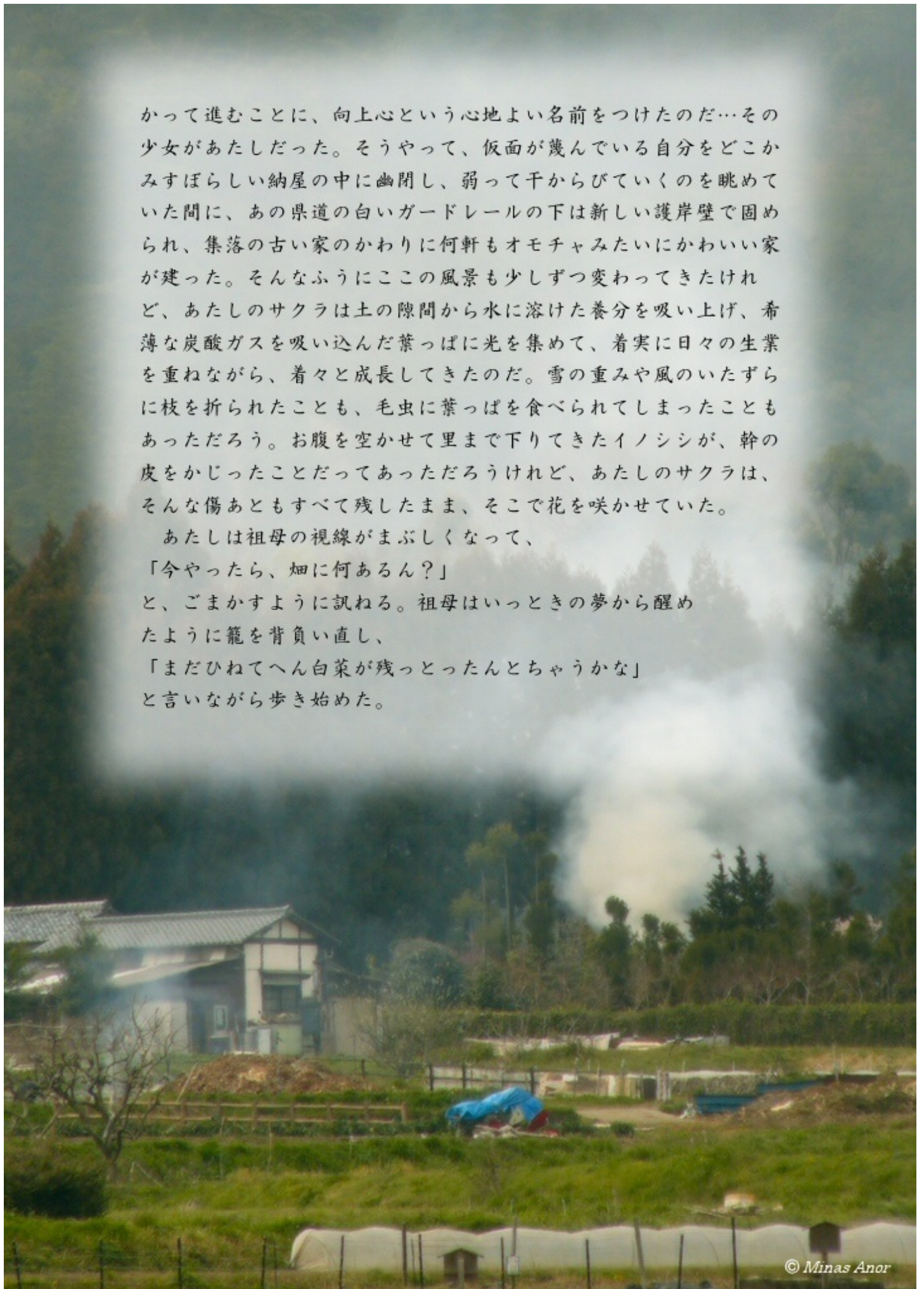
あたしは祖母の視線がまぶしくなると、

「今やったら、畑に何あるん？」

と、ごまかすように訊ねる。祖母はいっときの夢から醒めたように籠を背負い直し、

「まだひねてへん白菜が残ったんとちゃうかな」

と言いながら歩き始めた。



サクラ並木の方角に夕陽が沈んでいく。風景は薄紫色に満たされて、充満した水蒸気は切ないような甘い香りを発散し始める。「カオルが帰ったんやから、おる間くらいカマドでご飯炊こか」、と祖母が言ったので、あたしは前庭の小川でお釜を洗ってお米を研いでいる。台所には流しがあって裏山から引いた簡易水道の蛇口があるけれど、外にいて夕暮れの景色の中に浸っていたい気分だった。

「おばあちゃん、水加減見てな。あたし、ようわからへん」

「よっしゃ、よっしゃ。中指いっぽんや」

祖母はやかんから水を足して、中指の第1関節まで浸るようににした。

カマドの焚き口に杉の枯れ葉と小枝を入れて火をつけると、なつかしい煙の匂いとオレンジ色の炎の暖かさに、とてもやさしい気持ちになる。祖母は流しで野菜を洗ったりトリの肉を下ごしらえしたりしながら、あたしにご飯の炊き方を指導した。「はい、そろそろ薪くべて」、とか、「泡が出始めたら、よう燃えてる薪を出して」、とかいった具合である。

焚き口から洩れた煙は黒光りする梁にまどわりついて、ゆっくりと高い天井に向かって消えていく。祖母が何かを炒めるじゅうじゅうという音、熾火だけにしたカマドの上のお釜がたてるぶちぶちという音、そして満開のサクラを風が通り抜けていくさわさわという秘やかな音…目を閉じるとそういうなんでもない音が混じり合って、あたしの心に流れ込んでくる。

いろりに足した炭が熾り始めて、「きりん…こりん」という音をたてる。トリ鍋を古い鉄瓶に掛け替えて、祖母は食事の後かたづけをし始めた。あたしは、「後で手伝うから、後からしようよ」と言ったけれど、「疲れたやろから、休んどき」と言う祖母に甘えてしまった。

白菜とキジ肉のトリ鍋は、お砂糖があまり入っていないにもかかわらずほんのりと甘く、菜の花のおひたしは控えめにきりっと苦く、あたしはまるで欠食児童のようにご飯をおかわりした。あたしが炊いたご飯は、杉のお櫃に入れられてさらに旨みを増加させたようだった。お釜のふたを開けてご飯をお櫃に移す時、「うまいことお焦げができてるわ。カオル、ご飯炊くのうまいなあ」、と言いながら祖母は笑った。祖母の言葉と笑顔は、とても素直にあたしの心のどこかにすっぽりと収まった。あたしは少し誇らしく思っただけうれしくなった。そしてふいに、その誇らしさが、あたしの手垢にまみれた仮面から反射する虚像も含んだ乱反射からではなくて、もっと奥深い芯にある、単純で平滑なところの平面からの反射光に照らされて生まれていることに気づいて胸を詰まらせた。涙がぼろぼろこぼれて板の間に落ち、ころころと転がって祖母の膝に吸い込まれた。そっと割烹着の胸にあたしの頭を抱いた祖母が、「カオルちゃん、大きゅうなってからの方が、泣き虫になったんか？」

と、頭を撫でてくれた。

「…あたしね、あたしなんかダメだっていうふうにしか考えられなくなったんだよ。ここに響いてくるいろんなことが、その空洞で反響しながら弱まって行って、消え入りそうになる直前に言うんだ。お前はダメだ…お前には何もできない…」

心の中で起こった洪水がおさまると、今度はそういうことになった理由を自分の中に求めて、まるで狂った白血球が自分で免疫システムを壊すように自分を責めるようになった。そしてその時期が過ぎると、自分がすり鉢の底にいて、他のみんなが軽々とすり鉢の斜面を登って出て行くのに、あたしだけがいつまで経っても登れないという灰色の状態に変わった。

どよんと曇った灰色の景色の中に、ひび割れた仮面のまま鉛の服を着せられて放り込まれたような日々であって、ここの山や川、田んぼ、橋、それから茅葺きの屋根と青い空が思い浮かんだ時、瞬間濃い霧が晴れて目元から体が軽くなるような感覚にずいぶん慰められた。あたしは、誰かに手放しで褒められたかったのである…「カオルちゃん、頑張ったねえ。上手になったよ」、「カオルちゃんはいろんなこと知っててえらいなあ」…ただそれだけで良かったのだ。

去年の夏、父と母がここに滞在した時、家のいろんなほころびを補修してあった。中でもこのお風呂は新築みたいに綺麗になっていて、「今度田舎の家に行ったら、びっくりするで、きっと」と、うれしそうに父が言っていたのを思い出した。知り合いの製材所に分けてもらった檜の板を使って壁と床を張り替えた浴室は、風呂釜を炊く炎の熱気とお湯から立ち上る湯気がほどよく檜の香りを引き出していて、湯船につかっていると夢見ているような気分になってくる。

お湯は庭の前を流れる小川が裏山の谷間を流れ出て来たところからパイプを使って引いてきた水を張って沸かすので、ほんのりと暑い夏の日に泳いだ川の香りがする。それが檜の香りともあいまって、深い森の泉に浸っているようなところもちにさせてくれるのだ。

「ぬるなっていないかあ？」

祖母が焚き口の方から声をかけた。

「ううん。いい湯加減で気持ちええよ」

「トシオさん、えらい頑張ってくれたんで、綺麗になっとるやろ。ただの凝り性ゆうだけやのうて、ホンマに器用やさかい、素人の仕事やて思われへん」

あたしは父の自慢げな顔を思い出して笑ってしまった。

日が暮れてから少し風が吹き始めたので、散り急いだ花びらが格子の窓から舞い込んできて腕にはらりと止まる。うまく立たないと不安定な底板…この辺ではゲス板と呼んでいる…にのって、格子窓から外を眺めると、すっかり暗くなった西空を背景にして薄ぼんやりとサクラの雲が浮かんでいる。

湯上がりのほてった頬にサクラを通り抜けてきた風が心地よい。あたしはお風呂の焚き口にしゃがんで、熾火の中に放り込んだ小枝が小さな炎を上げるのを眺めている。お風呂で上機嫌になった祖母が、さくらさくら、をハミングし始めた。

「おばあちゃん、もう少し燃やそか？」

あたしが言っても、祖母は気づかなかった。年のせいか、耳が少し遠くなったようだ。あたしの言葉の残響は春の濃密な闇に吸い込

まれて消えてしまう。それでも気持が宙に浮かないで落ちついているのは、いたる所にいる何か目に見えないふんわりしたものが、あたしそのものを受け入れてくれていると信じることができるからだ…誇らしい自分も、それから情けない自分も。

祖母の気持ちよさそうな歌声を聴きながら、やわらかな光が洩れる格子窓を見上げると、庇越しに降ってくるような星空が目に入ってくる。あたしは格子窓の明かりを頼りに前庭のまん中まで歩き、改めて星空を見上げる。おおぐま、しし、ふたご、おとめ、うしかい…それから、目を凝らすとかんむり座も見える。アリアドネやペルセポネのお話を思い出し、そんな神話を細部まで覚えている自分に驚く。流れ星がひとつレグルスをかすめて流れ、土蔵の屋根の向うに消えていく。その横に咲いているサクラの根元で、おカッパ頭の少女がじっと見上げているのは、花びらを透かしてこぼれてくる星の光である。

5

「おばあちゃん、あたしね、この辺の景色が縮んでしもた気がするんよ。なんでやろ？」

「この前来たんはいつ頃やったかいな？もうだいぶ経ったんとちゃうか？ほいでやろ、きっと。長いこと見んかったら、この山はこげ低かったかいなとか、ここの谷はこげ狭かったかいなとか思うことあるわ。それは、おばあらあでもあるで」

座敷に敷いてもらったお布団の中に入って、あたしは祖母とそんな話をする。しばらくすると規則正しい寝息が聞こえてきて、祖母が寝入ったのがわかる。

電灯を消すと全くの闇である。こんな暗闇があることを久しく忘れていた。目を閉じると、うす紅色の雲が鮮やかに広がってくる。

アオサギが鳴いている。

あたしはお布団の中で天井を見上げて、おそらくは暗い空を飛んでいるであろう鳥の姿を想像する。真っ暗な空を飛ぶのは、たいそう怖いだろうなと思う。

「そんなことないんだよ。あの鳥は生まれつき、夜の空を飛べるようになってるんだもん」

あたしはじっと目を閉じていたつもりだったのに、どうやら暗闇にまぎれて閉じているのか開いているのかがわからなくなっていたようだ。声の方を見やると、座敷の隅、庭に面した障子の前に、さっき土蔵の横でサクラを見上げていた少女が座っている。

「花、見に行こうよ」

彼女のまわりは薄ぼんやりとした光に包まれて、赤い地にうす紅の桜模様を散らした四つ身兵児帯を結んだ彼女の姿が幻のように浮かび上がっている。

「あたし、長いこと待ってたんだよ…いつ来てくれるのかなあ、って」

起き上がったあたしの横に来て、少女はパジャマの袖を引っぱる。彼女の髪から、かすかな大島桜の香りが漂う。

「何度も花が咲いて、何度も花が散ったんだよ。お月さまは、太ってやせて、やせて太って…数え切れないほど何度も。けど、あたし、ちっとも退屈じゃなかった。夏は蛍や蟬と遊べるし、秋は田んぼでかくれんぼができる。それに冬は雪ウサギが作れるし、春は…いっぱい花が咲くから」

少女はとても楽しそうにそう言って微笑む。それはあたしがどうの昔に失ってしまった微笑みである。

戸外は遅く上がってきた月の明かりでほの青い。深い海の底なんて見たことはないけれど、ちょうどこんな感じなのではないかと思う。あたしと少女は手をつないで、田んぼのあぜ道を歩いていく。

「夜は外に出たらあかんよ、ガタロが出るよってな、って言われてるけど、あたしね、少しだけ遠くまで行ったことあるんだよ。向うの川までお魚を見に行ったら、言われた通りだった…お魚はきらきら光ってとても綺麗だったけど、川の中にいるもっと黒いのがあたしを呼んだんだ。あたしはなぜだかその声に応えてつい

ていかなきゃならないみたいな気持ちになったけど、雲が切れて現われたお月さまが、いけない、そいつは怖い悪いやつだ、って教えてくれたんだ。恐かったなあ、お月さまが見せてくれたそいつの顔…」

彼女はそう言って、つないだ手に力をこめる。

しんと静まった山の稜線に近く、真っ白な星が瞬いている。それを追いかけるように東から赤い星が立ち上がり始めた。ふいに起った風が、山の樹々を揺らし川の面を波立てて、少女の髪をなびかせて去った。サクラは青い海の底でひときわ白く燃え立ち、身を揺らせながら、か細い炎を散らせた。

「春が来て、去っていくんだね…」

「明日も一緒にいていい？」

「いいよ。こうやって今年の春をいっしょに見送ってあげよう」

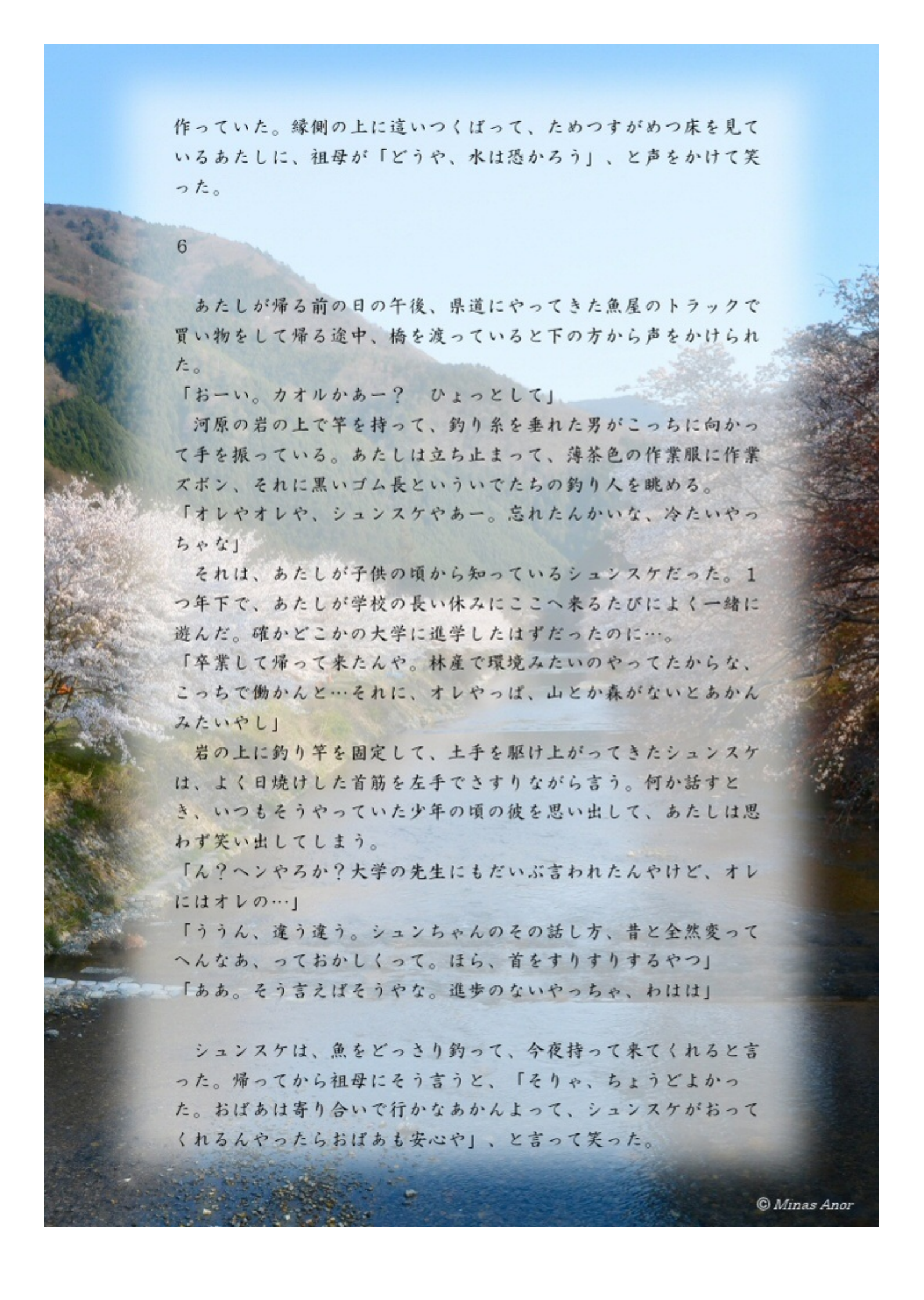
少女はあたしの腕にぶら下がるようにしてあたしを見上げ、うれしそうに笑った。

こんなふうに、あたしはこの山里で何日かを過ごした。

サクラの木は、日ごとに盛りを迎えては風に花びらを散らせ、地面に水面にやさしいす紅の模様を描いた。祖母は毎朝決まった時間に起き、お湯を沸かしてお茶を淹れ、それを仏壇に供えてお経を読んだ。あたしは、その時に鳴らすおりんの音で目覚め、前の小川で顔を洗って、それからお米を研いだ。あたしがカマドの前に座って火の番をしている間に、祖母は朝ご飯のしたくをした。おみそ汁の香りとカマドの煙の匂い、それと炊きあがってくるご飯の香りが、当たり前の暮らしを当たり前に営むことの尊さと重さを教える。あたしはとても充足した気持ちで、差し込んでくる朝の光線の中に模様を描きながら立ち上る煙を眺めた。

朝ご飯が済んだら、お布団を上げて掃除をする。畳の上を箒で掃くのは、なんだか不思議な感じがする。縁側の板の間から前庭へ、それと座敷から台所の土間に向かって掃き出す。板の間やいろりの周りには、掃いた後で雑巾がけをする。

バケツで雑巾を絞るとき、ふと昔読んだ文章を思い出して、バケツからしぶきが外に飛ばないように、そおっとそおっとやってみたけれど、やっぱり板の上には飛び散った水滴が小さな円形のシミを



作っていた。縁側の上に這いつくばって、ためつすがめつ床を見て
いるあたしに、祖母が「どうや、水は恐かろう」、と声をかけて笑
った。

6

あたしが帰る前の日の午後、県道にやってきた魚屋のトラックで
買い物をして帰る途中、橋を渡っていると下の方から声をかけられ
た。

「おーい。カオルかあー？ ひょっとして」

河原の岩の上で竿を持って、釣り糸を垂れた男がこっちに向かっ
て手を振っている。あたしは立ち止まって、薄茶色の作業服に作業
ズボン、それに黒いゴム長といういでたちの釣り人を眺める。

「オレやオレや、シュンスケやあー。忘れたんかいな、冷たいやっ
ちな」

それは、あたしが子供の頃から知っているシュンスケだった。1
つ年下で、あたしが学校の長い休みにここへ来るたびによく一緒に
遊んだ。確かどこかの大学に進学したはずだったのに…。

「卒業して帰って来たんや。林産で環境みたいのやってたからな、
こっちで働かんと…それに、オレやっぱ、山とか森がないとあかん
みたいやし」

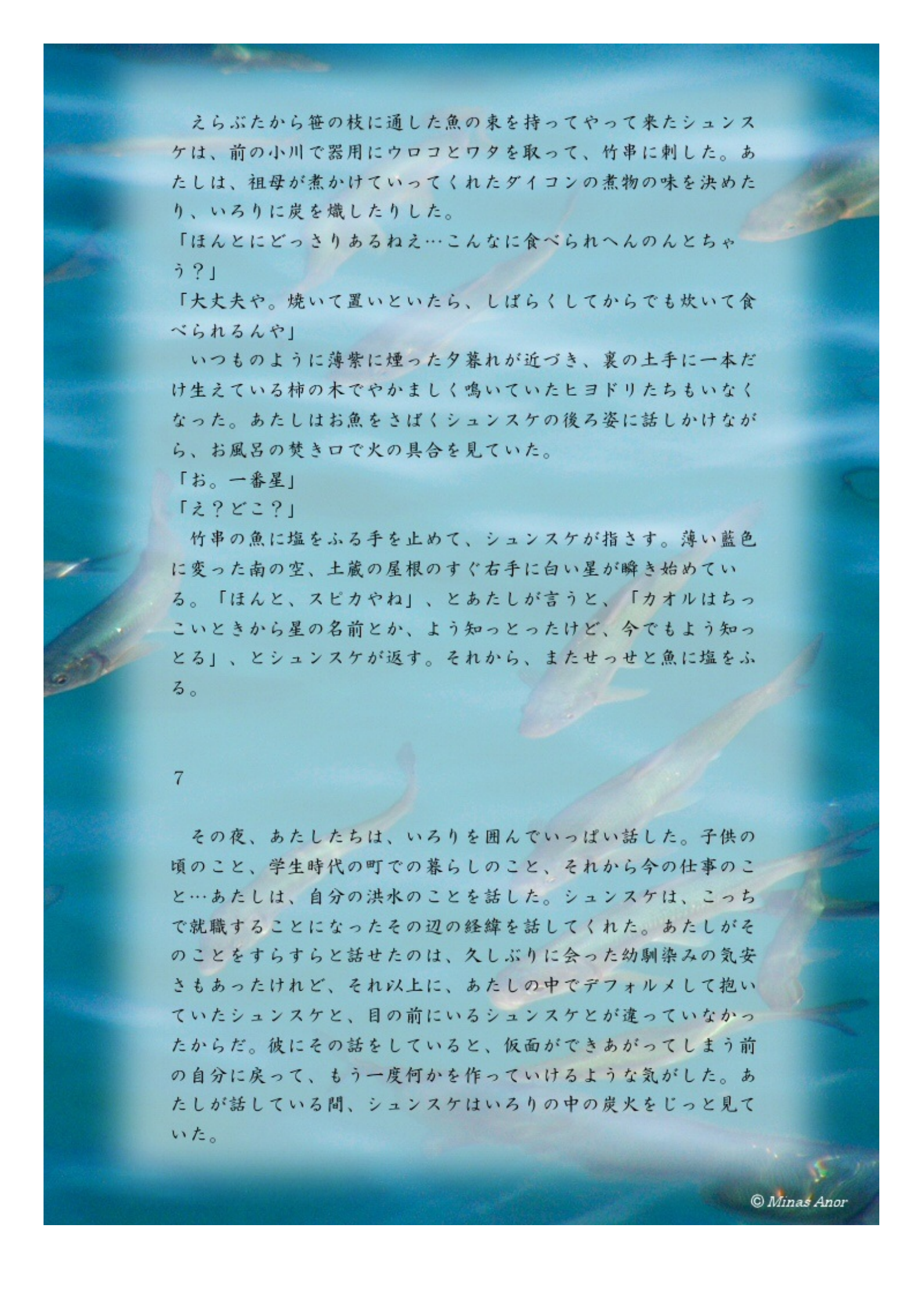
岩の上に釣り竿を固定して、土手を駆け上がってきたシュンスケ
は、よく日焼けした首筋を左手でさすりながら言う。何か話すと
き、いつもそうやっていた少年の頃の彼を思い出して、あたしは思
わず笑い出してしまう。

「ん？ヘンやろか？大学の先生にもだいぶ言われたんやけど、オレ
にはオレの…」

「ううん、違う違う。シュンちゃんのその話し方、昔と全然変って
へんなあ、っておかしくって。ほら、首をすりすりするやつ」

「ああ。そう言えばそうやな。進歩のないやっちゃん、わはは」

シュンスケは、魚をどっさり釣って、今夜持って来てくれると言
った。帰ってから祖母にそう言うと、「そりゃ、ちょうどよかった。
おばあは寄り合いで行かなあかんよって、シュンスケがおって
くれるんやったらおばあも安心や」、と言って笑った。



えらぶたから笹の枝に通した魚の束を持ってやって来たシュンスケは、前の小川で器用にウロコとワタを取って、竹串に刺した。あたしは、祖母が煮かけていってくれたダイコンの煮物の味を決めたり、いろりに炭を熾したりした。

「ほんとにどっさりあるねえ…こんなに食べられへんのとちゃう？」

「大丈夫や。焼いて置いといたら、しばらくしてからでも炊いて食べられるんや」

いつものように薄紫に煙った夕暮れが近づき、裏の土手に一本だけ生えている柿の木でやかましく鳴いていたヒヨドリたちもいなくなった。あたしはお魚をさばくシュンスケの後ろ姿に話しかけながら、お風呂の焚き口で火の具合を見ていた。

「お。一番星」

「え？どこ？」

竹串の魚に塩をふる手を止めて、シュンスケが指さす。薄い藍色に変った南の空、土蔵の屋根のすぐ右手に白い星が瞬き始めている。「ほんと、スピカやね」、とあたしが言うと、「カオルはちっこいときから星の名前とか、よう知ったけど、今でもよう知っとる」、とシュンスケが返す。それから、またせっせと魚に塩をふる。

7

その夜、あたしたちは、いろりを囲んでいっぱい話した。子供の頃のこと、学生時代の町での暮らしのこと、それから今の仕事のこと…あたしは、自分の洪水のことを話した。シュンスケは、こっちで就職することになったその辺の経緯を話してくれた。あたしがそのことをすらすらと話せたのは、久しぶりに会った幼馴染みの気安さもあったけれど、それ以上に、あたしの中でデフォルメして抱いていたシュンスケと、目の前にいるシュンスケとが違っていなかったからだ。彼にその話をしていると、仮面ができあがってしまう前の自分に戻って、もう一度何かを作っていけるような気がした。あたしが話している間、シュンスケはいろりの中の炭火をじっと見ていた。

「あたしね、いつときホントにぼろぼろ、って感じやったけど、仕事だけは続けよう、って思ったん。自信のかけらも残ってなかったけど、これやめたら、もう終わりやな、みたいに思う力だけは残ってたんよね」

あたしは話してしまうと、ずっと肩の力が抜けて軽くなる感覚がして、まだどこかに仮面のかけらが残っているのだということを知った。だけど、それもまた、やはり自分のありのままの姿なのだと分かっている自分を自覚することができて、うれしくなった。

「なんかやらんとあかん時には、ちょこっと頑張らんといかんけど、100パーセント自分を殺したらあかんで。カオル、子供の頃からそういうとこあったやろ…上の子やったし、オレなんかと違ってでき良かったし、周りにイメージつつーか、そういうの作られてしもてる、みたいなどこあったやんか…」

そんなシュンスケの言葉も、とても素直に心に流れ込んできた。

「カオルさ」

「ん？」

「覚えとる？」

「なにを？」

「小学生のとき、オレがゆったこと…」

シュンスケは鉄瓶からお銚子を取り出して、手酌の盃を飲み干し、あたしのほうにもお銚子を差し出す。

「ねえねえ、さっきの話。なに？シュンちゃん、なんてゆったん？」

「あ、いや…もう、ええ。カオルがあんまり綺麗になってしもたよって、もうゆわれへん。あはは」

「なに、それー。嫌やわあ。ちょっと、ゆってよお、気持悪いやん」

シュンスケは座布団を丸めた上に腕を載せて横になり、いろりに刺した魚の串を回してみたり、位置を変えたりしながらしばらく考えていた。そうしている間に、手酌で注いだお酒を3杯ほど飲み干した。

「えっとなー…オレ、おっきくなったら、カオルを嫁さんにするんや、ってゆうたんや」

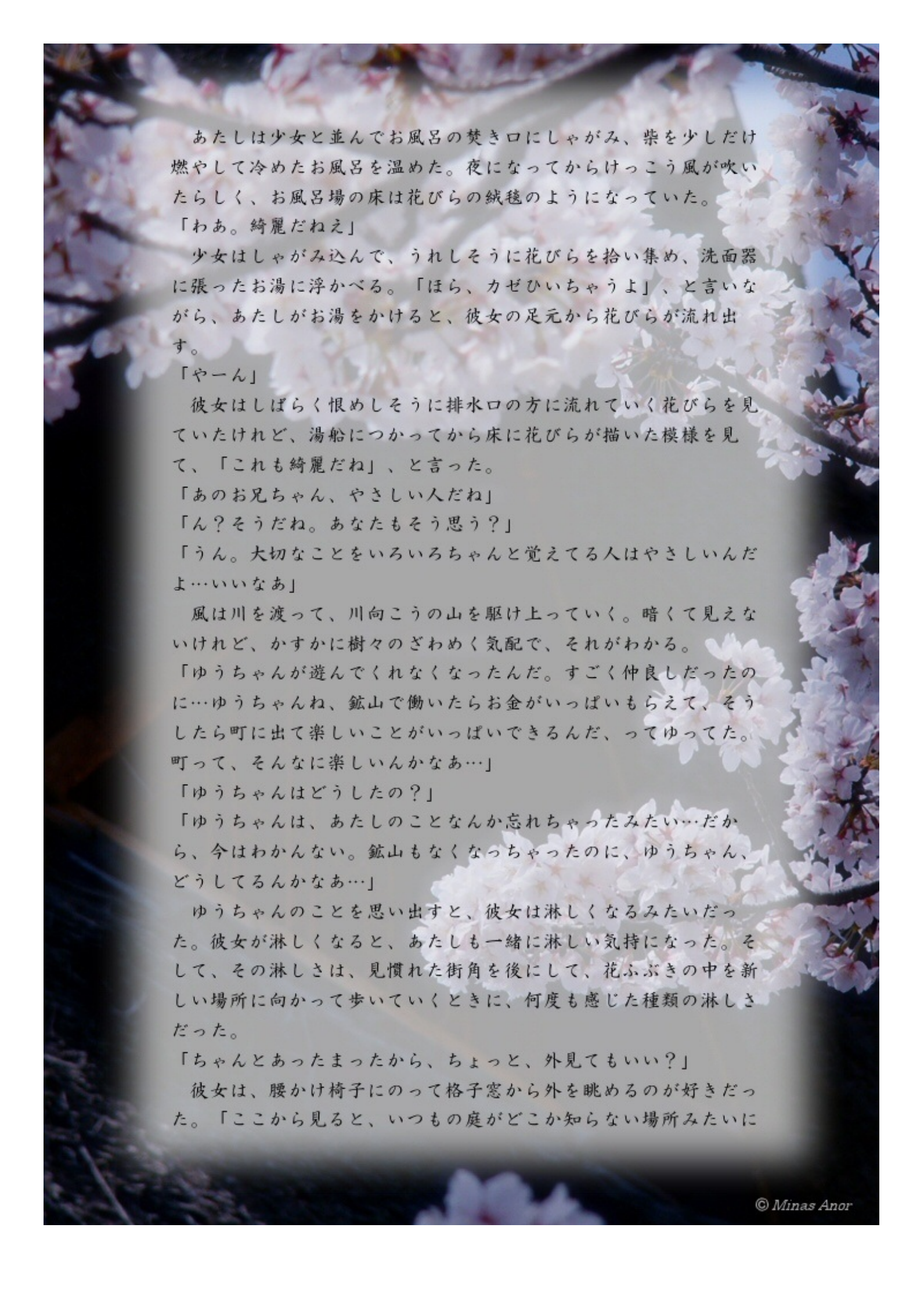
そう言ってシュンスケは、くるりといろりに背を向けて手枕に頭を載せた。あたしはなんとなく冗談めかして応えるのがはばかりれるように感じてしまい、「そんなことあったかなあ…」と独り言のように言った。たぶん、いつも一緒に遊んでいるあたしたちをからかって、口の悪いおじさんたちがはやし立てたりしたことがあったんだろう。シュンスケは、それに口答えしてそんなことを言ったのかも知れない。

風に揺れた戸板が、一瞬だけがたがたと鳴った。厨房の窓から入ってきたのか、サクラの花びらが3枚、はらはらと舞いおりて、板の間に落ちた。あたしは1枚を自分の盃のお酒に浮かべ、もう1枚をシュンスケの盃に浮かべた。そしてもう1枚は、カマドの前に座ってあやとり遊びをし始めたあの子にあげた。

8

酔っ払って眠ってしまったシュンスケを引きずるようにして客間に寝かせた。シュンスケは、「ん、わかつとる、わかつとる」と、ろれつの回らない口で言いながら立ち上がろうとしたけれど、かなり飲んだらしく、またばたと板の間にひっくり返ってしまった。あたしが起こそうと腕を引っぱった一瞬、彼はまるで一気に酔いがさめたような目であたしを見つめ、「カオル、帰ってこい」と言いながら、あたしを抱きすくめようとした。驚いたあたしがシュンスケの肩を突き放すと、彼はごろんと大の字に伸びて、うわごとのように、「カオル、帰ってこい」と繰り返すのだった。

お布団に入ったら、シュンスケはすぐに寝入ってしまった。盃の中で浮かんだサクラの花びらをゆらゆら揺らせながら、あたしはしばらくの間、いろりの前でぼんやりしていた。あたしの耳の後ろに小さな空洞ができて、その中でシュンスケの言葉が何度も何度も反響した。カマドに立てかけてある火吹き竹が倒れるカランという音にふと見ると、あの子がカマドの前に立って、じっとあたしを見ていた。あたしはわけもなくどきまぎしてしまい、それをごまかすようにいろりの周りの食器を片づけ、炭火に灰をかぶせた。



あたしは少女と並んでお風呂の焚き口にしゃがみ、柴を少しだけ燃やして冷めたお風呂を温めた。夜になってからけっこう風が吹いたらしく、お風呂場の床は花びらの絨毯のようになっていた。

「わあ。綺麗だねえ」

少女はしゃがみ込んで、うれしそうに花びらを拾い集め、洗面器に張ったお湯に浮かべる。「ほら、カゼひいちゃうよ」、と言いながら、あたしがお湯をかけると、彼女の足元から花びらが流れ出す。

「やーん」

彼女はしばらく恨めしそうに排水口の方に流れていく花びらを見ていたけれど、湯船につかってから床に花びらが描いた模様を見て、「これも綺麗だね」、と言った。

「あのお兄ちゃん、やさしい人だね」

「ん？そうだね。あなたもそう思う？」

「うん。大切なことをいろいろちゃんと覚えてる人はやさしいんだよ…いいなあ」

風は川を渡って、川向こうの山を駆け上っていく。暗くて見えなけれど、かすかに樹々のざわめく気配で、それがわかる。

「ゆうちゃんが遊んでくれなくなったんだ。すごく仲良しだったのに…ゆうちゃんね、鉱山で働いたらお金がいっぱいもらえて、そうしたら町に出て楽しいことがいっぱいできるんだ、ってゆってた。町って、そんなに楽しいのかなあ…」

「ゆうちゃんはどうしたの？」

「ゆうちゃんは、あたしのことなんか忘れちゃったみたい…だから、今はわかんない。鉱山もなくなっちゃったのに、ゆうちゃん、どうしてるのかなあ…」

ゆうちゃんのことを思い出すと、彼女は淋しくなるみたいだった。彼女が淋しくなると、あたしも一緒に淋しい気持になった。そして、その淋しさは、見慣れた街角を後にして、花ふぶきの中を新しい場所に向かって歩いていくときに、何度も感じた種類の淋しさだった。

「ちゃんとあったまったから、ちょっと、外見てもいい？」

彼女は、腰かけ椅子にのって格子窓から外を眺めるのが好きだった。「ここから見ると、いつもの庭がどこか知らない場所みたいに

見えておもしろいんだ」、と言って、あたしがせかすまでずっと見ている。その夜は、あたしも湯船の中で立ち上がって、二人で外を眺めた。

何かを置き忘れてきたような顔の弓張り月が傾いて、山の端に隠れようとしていた。

ゆうちゃんのことを考えているのだろう、お風呂から上がっても口数が少なく、なんだか所在なげにあやとりのひもを玩んでいる。いつもなら大抵、花を見に行こうと言ってせがむのに…。

「今夜はどうしたん？元氣ないね…あ、そうだ、お餅食べようか。サクラ餅、買ってきたんだ」

あたしを見上げた少女の髪が揺れる。そして、かすかな大島桜の香りが漂う。

「葉っぱのところは食べられないの、ちょっと塩辛いから」

そう言って、彼女は茶色い葉っぱを剥いてピンク色のお餅を大事そうに食べた。

「この葉っぱは去年のやつなんだろう…花が散っちゃったら、葉っぱが出て、サクランボができるね」

「そうだね。そうしたら、また緑と青の夏が来るんだ。そう言えば、洞穴の井戸はまだあるの？」

「あるよ。蟬と遊んだ後、あそこで冷やしたスイカを食べるんだ。種をプップって出して」

少女の瞳を通して、あたしには夏の昼下がりの透明な空気が見える。川で泳いだ後、川の水に含まれていた森のほのかな香りを肌に漂わせて祖母にスイカをねだっていた少女が、そして蟬しぐれの縁側で本を読みながら寝入ってしまった少女の姿が見えるのだ。

「いつでも帰ってきたらいいよ。あたし、遊びながら待ってるから」

あやとりの‘川’を差し出しながら、彼女が言う。

「あなたは、どこにいるの？」

「あたしはおばあちゃんの中にいるもん。おばあちゃんは気がついてないけど、あたしはずっとおばあちゃんの中にいるんだよ」

そう言って、彼女は‘鼓’を完成させた。

「それから、あなたの中にもいるよ」

あくる朝、あたしが片づけをして荷造りを済ませた頃になって、
やっとシュンスケが起き出してきた。

「やあー、すまんすまん。完全に寝てもうた、だはは。気分ええ
わ」

「寝坊なところも、昔と一緒になんやから、もう」

「まあまあ、そうゆわんと。その代わりゆうたらなんやけど、県庁
にちょっと用事あるし、送っていったるわ、駅まで」

少し恥ずかしそうに頭を掻きながら、前庭の小川に顔を洗いに行
く彼の後ろ姿に、いよいよ本格的に散り始めた花ふぶきが重なる。
移ろいゆく季節は、寝覚めの夢のように軽い淋しさを残しながら、
巡り来る次の季節への希望を醸し出す。すべてのものは同じ順序で
少しずつ姿を変えてはまた巡るのだ。

「…それでいいじゃない、ね」

あたしは、はらはらと花びらを運ぶ空を見上げてつぶやく。

「ん？なんかゆったか？」

「ううん、なんも。独り言」

「そしたら、オレ、ひとつ走り家へ戻って、クルマとって来るわ」

「あ、だったら、裏山の桃畑まで来てくれへんかなあ。おばあちゃ
んのお墓参りして行きたいし」

「了解了解」

道を使わないで、田んぼのあぜ道を急ぎ足で歩いていくシュンス
ケを見送りながら、あたしは緩い登り坂をゆっくり歩いていく。
山の際の杉林のほうから、上手になったウグイスが、「ほー、ほけ
きょ」、と鳴く声が聞こえる。

あとがき

最後まで読んでくださったみなさん，ありがとうございます♪

この作品は，今から10年前，2005年に，うおのめ文学賞を頂いたものに新たに撮った写真を合わせて構成したものです．

その後，残念ながら，うおのめ文学賞は中断されたままですが，いつか，また再開されることを願って，少しずつ書いていきたいと思っています♪

使用した写真の撮影地は，京都の京北と大原，奈良の佐保川，伊豆の河津，高野山，飛騨高山，田沢湖 です．

2015 夏

藤原 絵理子

Sakura

<http://p.booklog.jp/book/90413>

著者：藤原 絵理子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arwen-eriko/profile>

all photos by Arwen_Eriko

©*Minas Anor*

All rights reserved

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90413>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90413>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ